http://decfamily.p1.bindsite.jp/2013NEW/

We 25R

No.192　03/04/24

すばる

ハワイ島研修の主人公は２学年ということで、参加したいと思っている人も多いことだろう。ボストンのMIT訪問なども予定されており、人気が高まっているという話も聞いた。選考結果は連休明けに分かるそうだ。

さて、そのメインテーマである「すばる望遠鏡」であるが、その命名の由来について、小平桂一先生の著書『宇宙の果てまで』（ハヤカワ文庫）から引用してみよう。

＊

応募してきたのは約三千五百通で、選考は委員会を設けて行われた。一番多かったのが「ビッグ・アイ(BIG EYE)」だった。これはかつてパロマーの巨人望遠鏡が誕生した時にも使われた名なので、敬遠することにした。次に「銀河」が多かった。ところが日本のエックス線科学衛星で同名のものが活躍中とあって、これも駄目だ。そんな風なのがいくつか並んだ次に、「未来」と「すばる」が来た。　「日本が初めて外国に建造する大型科学施設だから、大和言葉がよい」という意見は強かった。「アルファベットにしろ」という考え方もないわけではなかったが、大和言葉組の声が大きかった。事前の取沙汰では「まほろば」とか「まんだら」などもあがっていたが、応募してきた中では少数派に止まった。「すばる」は、清少納言が枕草子に「星はすばる」と書いている。同じく「春はあけぼの」もあって、これも天象に関係がある。関取の曙にひっかければ、ハワイにも関係がある。そこまで言うなら、天文台のある武蔵野にかけて「武蔵丸」はどうかという説さえあった。選考委員会での決戦は「みらい」対「すばる」になった。それぞれ言い分があったらしい。「MIRAI」も「SUBARU」も三音節で簡明でよい。中央の母音Aを挟んで前者は「I」が、後者は「U」が繰り返される。「Iは理知的で切れるが、Uは内に籠もって鈍い」と未来派が主張する。「やはり天象に関係がある方がよい」と昴派は応戦する。最後は古在天文台長の、「『みらい』ではなかなか予算が付かないみたいだ」の一言で、「すばる」に決着したと伝えられている。

「すばる」はいうまでもなく、プレアデス星団の和名だ。中国では昴宿(ぼうしゅく)」。若い青い星が肉眼でも六〜七種類集まっているのが認められるが、暗いのまで含めると、実は百個以上の若い星の大集団である。ほとんど同時に誕生したこれらの星の年齢は、一千万年くらいと推定される。牡牛座にあって、冬の空にキラキラと輝く、目立つ存在だ。自動車の名にも採用されていて、それを気にした人も多かった。とりわけ僕などは「スバル360」といえば、乗用車普及の初期の、小容量エンジンの簡易車を想い出す世代である。今は乗用車として一流だとしても、何かその会社の寄付で造る望遠鏡だと思われかねなかった。(なに、構わない。すばるはもともと星団の名。こちらが本家さ。自動車会社には貸してあると思えばいいさ)と考えることにする。「すばる」は「すべるー統べる」の自動詞で、一つに集まるの意味だそうだ。

「SUBARU＝プレアデス星団」の名がハワイに伝わると、ハワイ語ではこの星団を「マカリイ」と呼んで、古くから航海の目印に使われてきた、と教えてくれた。面白いことに、これはハワイ語で「小さな眼」という意味だそうだ。「BIG EYX」が「大きな目」なのに、結局は「小さな眼」になってしまった。

＊

「BIG」から「小さな」へ。印象的なまとめで、小平先生、なかなかの文章家である。